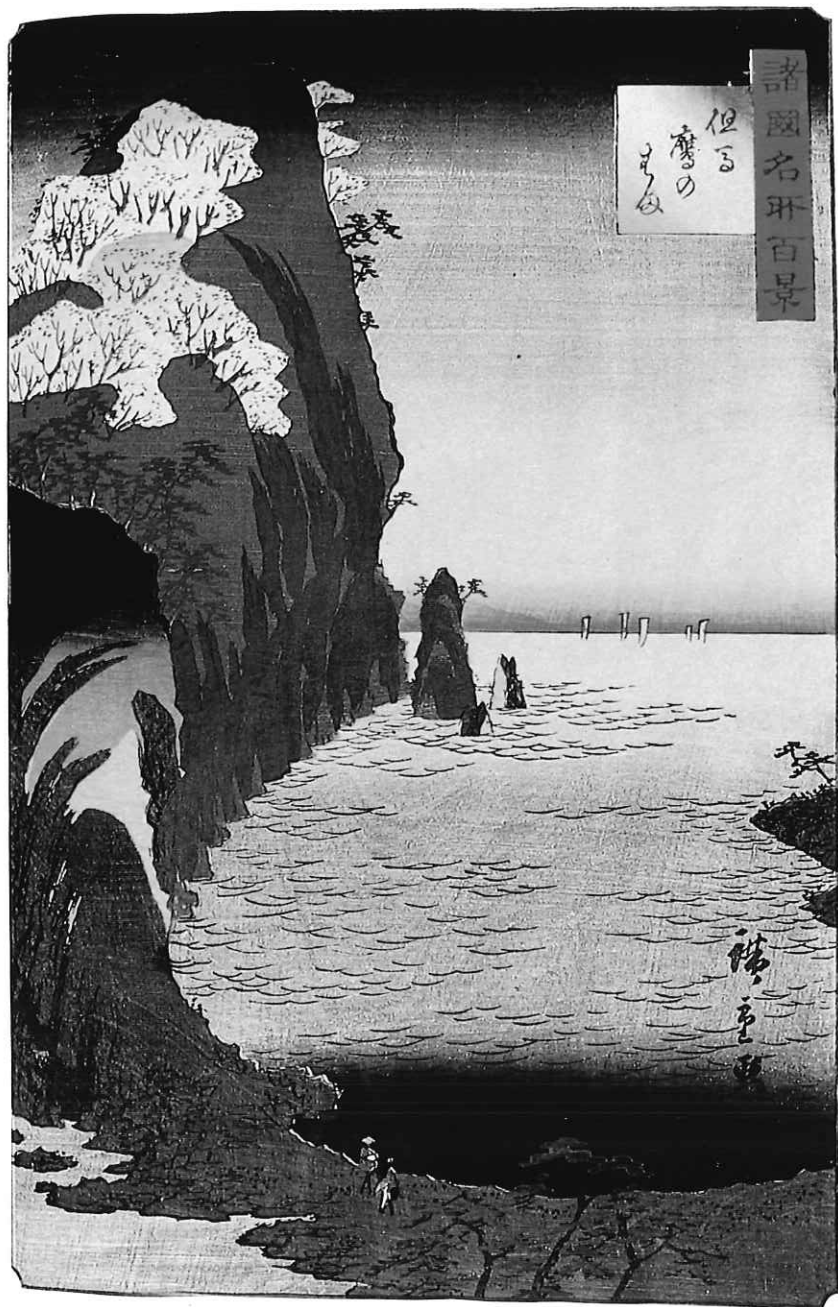


竹野町史

通史編



諸國名所百景

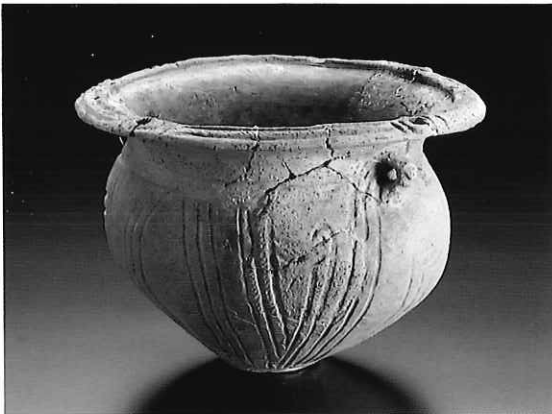
但馬
鷹のはま
の
はま

鷹のはま

「諸國名所百景〈但馬 鷹のはま〉」
安藤広重筆（国立国会図書館蔵）



鬼神谷 3号窯遺物出土状況



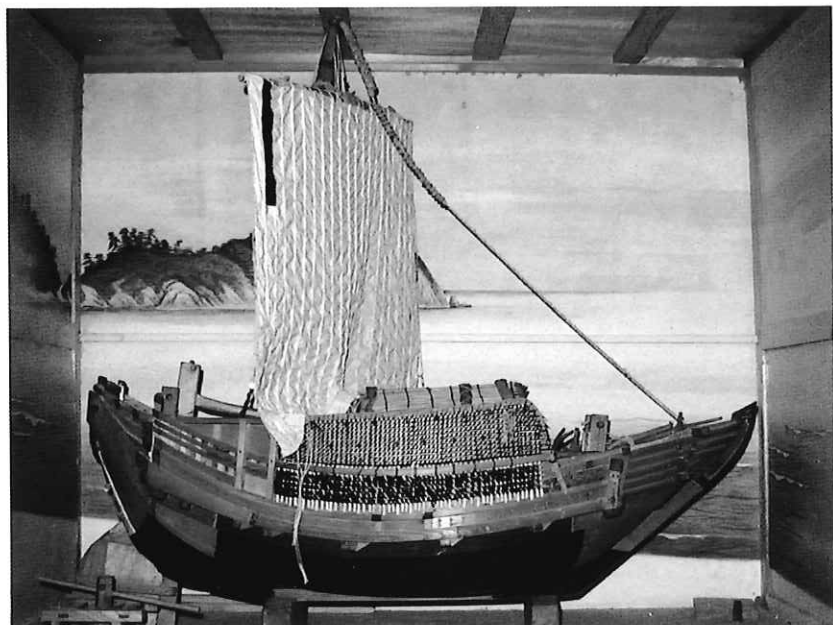
小森岡出土縄文後期の深鉢



絹本淡彩月庵宗光像
(須谷・円通寺蔵)



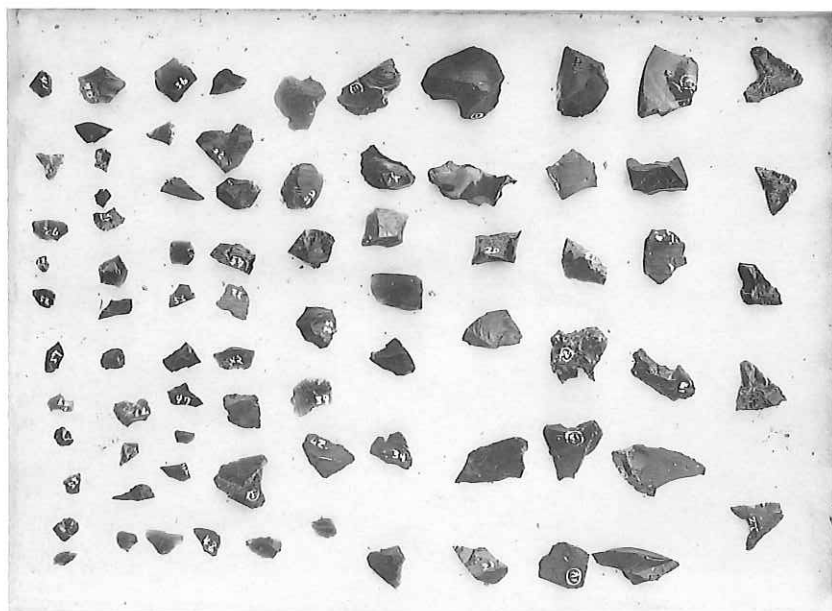
(裏面) (正面)
八大荒神 (須野谷・熊野神社蔵)



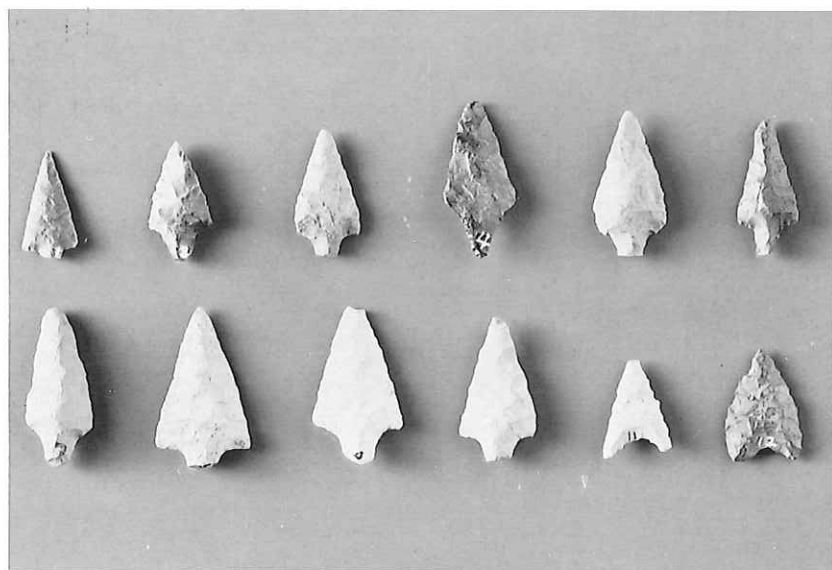
模型千石船 (竹野中学校蔵)



難船絵馬 (竹野・興長寺蔵)



堂ノ上遺跡出土黒曜石（椒）



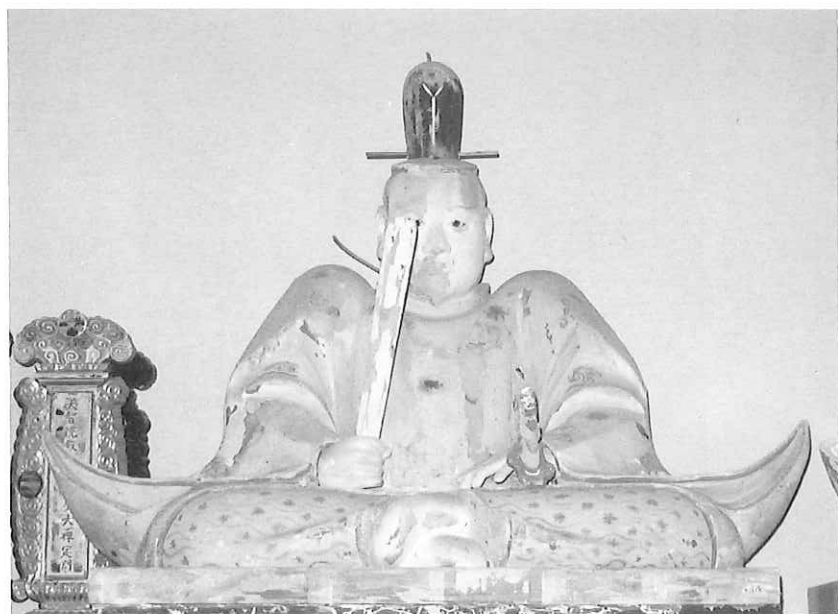
小森岡出土 石鏃（松本）



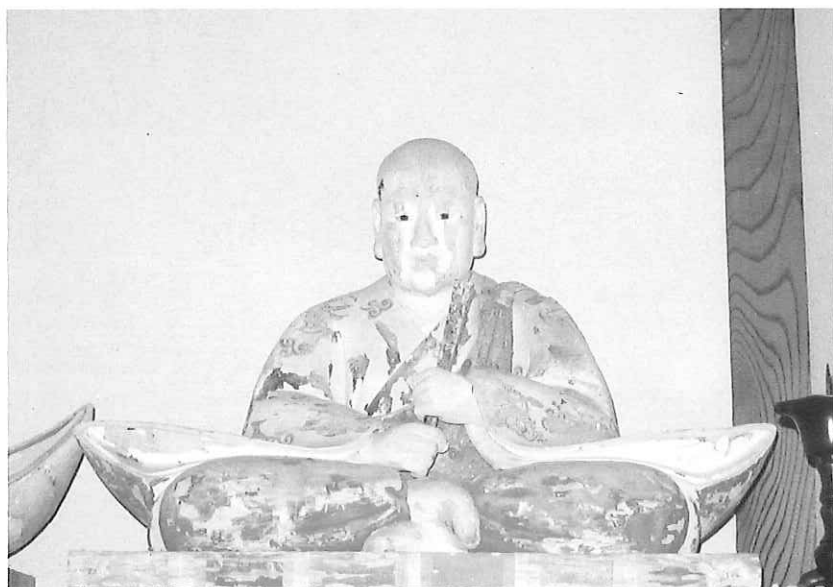
出持地・方形台状墓全景（須谷・阿金谷）



阿弥衣（竹野・興長寺蔵）（非公開）



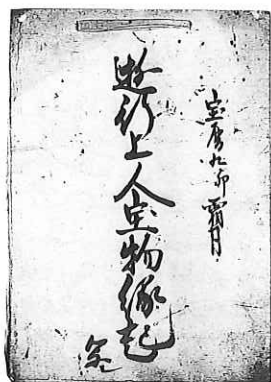
山名時義木像（須谷・円通寺蔵）



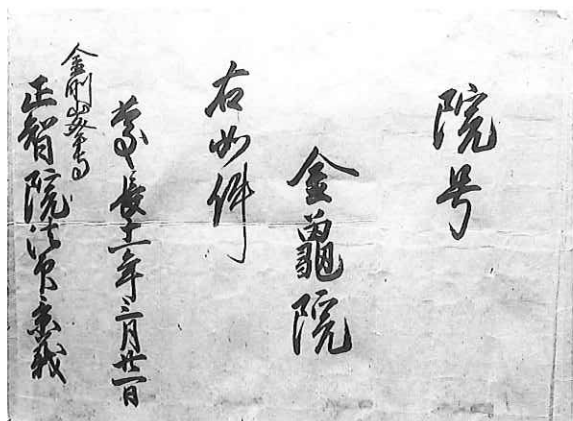
山名時熙木像（須谷・円通寺蔵）



燭椒神社 (椒)



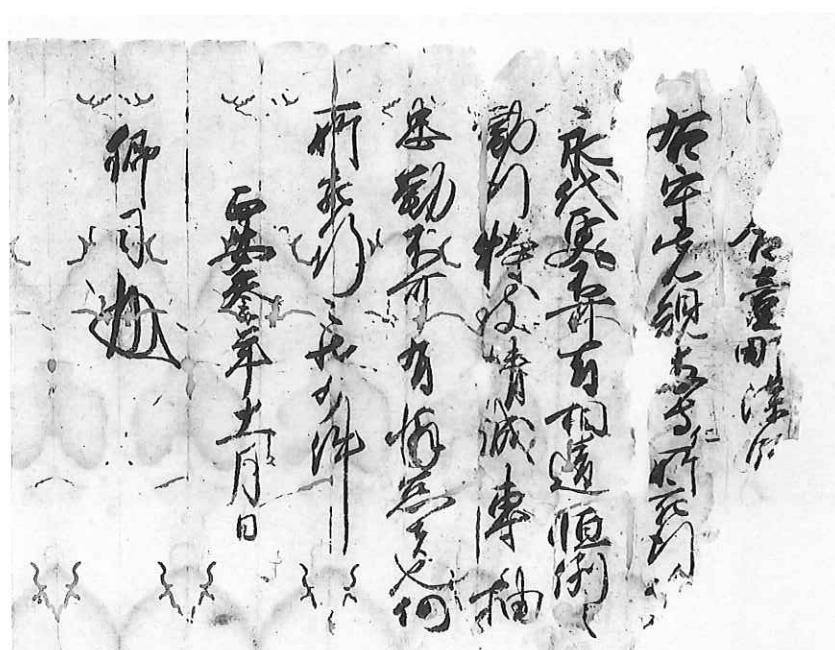
「遊行上人宝物縁起・写」
(藤・細田昌蔵)



慶長11年「院号」(羽入・金龜院蔵)



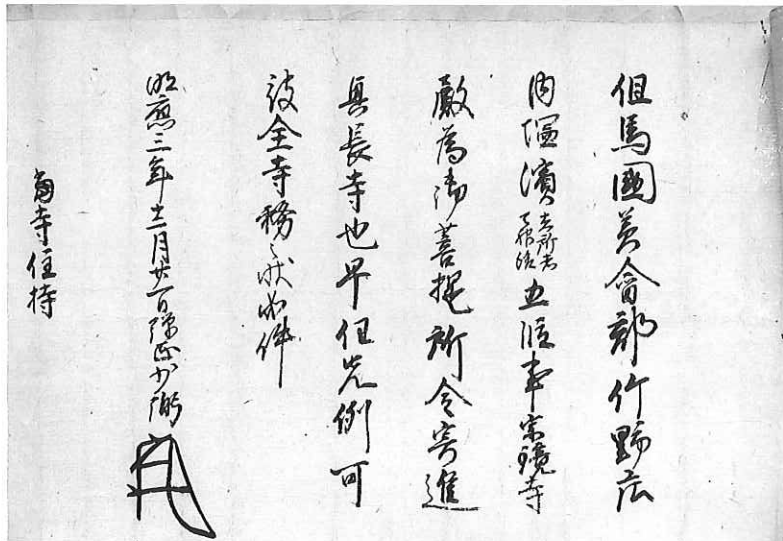
鷹野神社（竹野）



正安3年「郷司某下地」（藤・蓮華寺蔵）



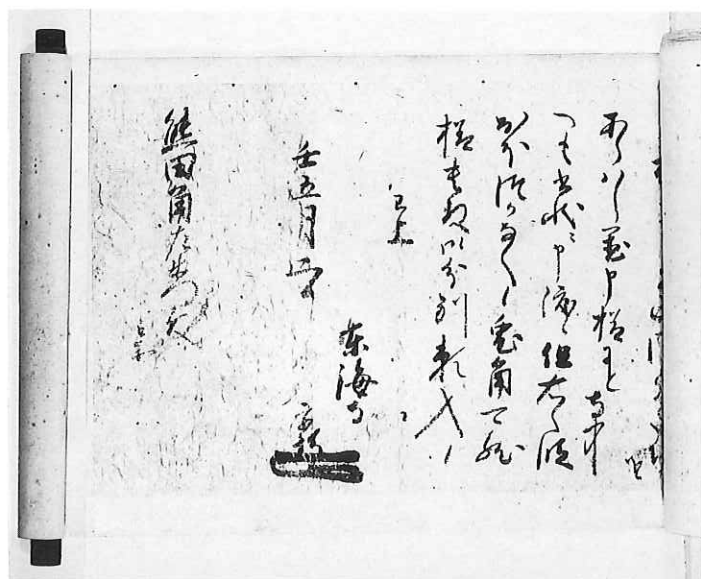
泉宝僧正木像（轟・蓮華寺蔵）



明應3年「塩浜寄進状」（竹野・興長寺蔵）



竹野鉦山製錬所（東大谷）



沢庵禪師書・小出家願出（須谷・円通寺藏）

発刊のことは

竹野町長 山本雅康



私たちのまち竹野町は、南は氷ノ山・後山・那岐山国定公園の北面にあり、北は日本海に面し、山陰海岸国立公園に位置し、変化に富んだ海岸美と海水浴場をもっている。緑と海と太陽の町を標榜し、山と海の豊かな自然に恵まれ、遠い古代から先人たちが住みつき、やがて村をつくり、その村人たちが歩んできた歴史が

それぞれの地域に残されています。

現在の竹野町は、昭和三十年（一九五五）三月、三椒村・奥竹野村・中竹野村・竹野村の四カ村が合併し、新しい竹野村を経て、昭和三十二年四月町制施行により現在の竹野町が発足し、今年で合併三十五年を迎えました。合併前の各村にはそれぞれ異なった歴史や文化がありました。それらの歴史をつづった出版物はほとんど残されていませんでした。また、この郷土の歴史を伝える資料も時代の移り変わりとともに散逸する心配も生じておりますので、この誇り高い郷土の歴史

と文化をひもとき後世の人びとに残す必要を強く感じて、昭和五十五年（一九八〇）から町史の編纂に着手いたしました。

『竹野町史』は有史以来、現代に至るまでの町の歴史をつづったものであり、これによって町民各位が自分たちの郷土を理解し、先人の築いた郷土に感謝と愛情を持ち、明るく住みよい豊かな誇りある町づくりと発展のために役立てていただくことを期待いたします。また県内外の方々にも竹野町の歴史と文化をご理解いただき、ご活用いただければ望外の幸せと思います。

この編纂と執筆は、文献や資・史料の乏しいなかで、それらの発掘に始まり、その調査や執筆を担当された先生方のご労苦は言葉には尽くせないものがあつたことと思います。

平成二年三月の合併三十五周年の意義ある年に完成を見ることができましたことは、この町史によって郷土の成り立ちを知り、先祖の功業をしのいで、竹野町の将来の発展への足がかりとなる好機となれば幸甚とするところであります。発刊に当たり、編纂並びに執筆をしていただきました委員の方々のご努力に心からお礼を申し上げます。

なお、資・史料等の提供をいただき、発刊にご協力をいただいた町内外の各位と、編纂委員や執筆者及び事務担当者に対して、深甚なる感謝を申し上げます。

序 文

私と但馬との関係は深く、豊岡市田結の西光寺に住職として御縁を結ばさせていただいてから四十年余りになります。私の寺は高野山真言宗であるが、竹野結衆に属しており、竹野に出向くことが多く、寺ばかりではなく、地区の人々とも親しくしていただいている。

私は、四十歳を過ぎたころ、ふたたび学問を志し、五来重先生に指導してもらうために大谷大学大学院に入学した。先生とは、高野山大学以来の御縁で、ここで、民俗学を基本とする歴史学の研究方法を学んだ。

そのころ、先ず調査して歩いたのが、但馬地域の中でも竹野町に集中している両墓制の研究で、この制度を求めて全地区を歩いたのが、今でもなつかしく思いだされる。

こうした調査の際の私たちの先生は、各地区の古老たちであったが、ほとんどの人々が、親切に教えて下さった。

民俗学を主体とする歴史の研究は、究極には、「日本人の心」の追求になると思っている。そして、どの人にも、この心が流れており、それにふれるたびに、私は感激を覚える。私が、少しでも民俗学を学び得たとすれば、それは、但馬の人々のお陰なのである。

大谷大学を終えて、私は幸いにも母校の高野山大学に勤めることができ、今でもこれらの研究を進めている。

こうしたなかで、もう八年前になるが、金亀院住職で、町史編纂副委員長（現・委員長）の山本祐雄師と教育委員会の方々が、拙寺を訪れて、監修者の依頼に來られた。私は身にあまる大役と思いい度は辞退を申し出た。

しかし、たび重なる依頼の後、最後に町史編纂委員長の年老いた伊藤俊三先生が、その身をわざわざ拙寺まで運ばれて、懇切な願いをのべられた時、私は観念しました。

当初、町の方針では、地元の人々だけで町史を執筆することになっていましたが、専門の学者も入れていただくことをお願いし、五来重先生の門下を主体とする私に縁ある方々に協力を求めたところ、皆こころよく了解していただき、竹野町史編纂の陣容を整えた。

編集方針も、みなさんに親しまれることを第一の目標とし、第一巻を通史編、第二巻を民俗・文化財を主体とする編の全二巻とすることにした。

私は近頃、六十歳を過ぎ、世間に対して、これまでにいろいろ御世話になった御恩返しをしておかなければならないとの思いにかられる。

本書の刊行が、竹野町の多くの皆様方に親しんでいただけるなら、望外の喜びである。そして、五来重先生の教えを受けた私たちが、力を合わせて、一つの成果を世に出すことができ、その学恩

に報いることになれば、この喜びはさらに大きいものとなる。

つたない私がこの重役をお引き受けをしてから、町長さんは賀嶋堅治氏から山本雅康氏へ、教育長さんも、小田慶長氏から井垣克巳氏に、編纂委員長も、伊藤先生から山本先生へと代わった。

しかし、実地調査に力を入れる私たちが竹野町に訪れるたびに、何時も温かく迎えて下され、できるだけの便宜を計って下さった地元の町史編纂委員・事務局の方々や町民のみなさんに感謝の思いが深く残っている。

本年は、丁度竹野町の合併三十五周年に当たる。このおめでたい時に、この本が無事に刊行できたことを、町民のみなさんとともに喜びたい。

平成二年三月

監修者 日野西 眞定

凡 例

- 一、この巻は、竹野町史の「通史編」である。
- 一、本文の記述は、原則として常用漢字、現代仮名遣いを用いた。ただし、歴史用語・学術用語・固有名詞などは、これによっていない。
- 一、読みにくい漢字や学術用語には、なるべく初出のところで、ふりがなをつけるようにした。
- 一、引用史料が漢字の場合は、できるだけかなまじりの読み下し文にするようにつとめたが、中には原文のまま掲記し、適宜、句読点・並列点・返り点をつけたものもある。
- 一、年号は、日本年号を使い、明治六年までは一応陰暦で表し、原則としてその下の（ ）内に西暦年を付記した。
- 一、人名は、史料提供者も含め原則として敬称を省略したので、各位には了承されたい。
- 一、史料その他の引用にあたって他の文に組み込むときは、「」で示し、出典を示す必要のある場合は、書名・雑誌名を『』で、論文は「」で表記した。
- 一、文意の通じない箇所には、(ママ)、疑問の場合は(〇〇カ)と傍記した。
- 一、写真・図・表には、それぞれ写1・図1・表1のように略記し、一連番号をつけた。また巻末に、写真・図・表の一覧表を添えた。
- 一、本巻の執筆分担は巻末に掲載した。

自然編

総論

第一章 竹野町の自然環境

第一節 竹野町の地形……………

第二節 竹野町の気象……………

第三節 竹野町と但馬の地質……………

8

10

14

前史・考古編

総論

第一章 石器の使用された時代

第一節 原始時代の竹野……………

25

第二節

縄文時代の竹野

32

- (1) 人類の発生
 - (2) 旧石器時代とは
 - (3) 但馬の旧石器と遺跡
 - (4) 竹野町の旧石器
-
- (1) 縄文時代の但馬
 - (2) 縄文時代草創期
 - (3) 縄文時代早期
 - (4) 椒・堂ノ上遺跡
- 土器片 石器
- (5) 縄文時代前期
 - (6) 縄文時代の海進現象と竹野
 - (7) 縄文時代中期
 - (8) 縄文時代後期
 - (9) 松本・小森岡遺跡
 - (10) 貝塚について
 - (11) 縄文時代晚期
 - (12) 竹野町その他の縄文遺跡

松本・土生谷遺跡 松本・見蔵岡遺跡 林・三味ヶ岡遺跡

神原遺跡 神原出土の石棒

(13) 縄文人のくらし

高原のくらし 海辺のくらし 交易

第二章 金属器伝来以後

第一節 弥生時代の竹野

(1) 稲作の伝来

(2) 弥生文化の波及

(3) 竹野町の弥生遺跡

椒・堂ノ上遺跡 椒・中村遺跡 松本・土生谷遺跡

松本・小森岡遺跡 鬼神谷窯跡 出持地遺跡

第二節 竹野町の古墳時代

(1) 古墳時代とは

(2) 弥生時代の墳墓から古墳へ

出持地・方形台状墓

(3) 但馬の前期古墳

阿金谷古墳群

(4) 大型古墳の出現

竹野町の大型古墳

下塚・小山古墳／桑野本・稲蔵古墳／和田・太田七号古墳

(5) 横穴式石室古墳の登場

田久日・ヨグレババ古墳 草飼・寺谷古墳群 松本・後期古墳群

宇日・宇日古墳群 田久日・オノ神古墳 西町・南アンジャ古墳

浜須井・大谷古墳 林・坂の谷古墳群

(6) 阿金谷の横穴墓

第三節 竹野町の須恵器窯跡

鬼神谷窯跡

第四節 歴史時代の遺物散布地

古代編

総論

第一章 古代国家の構造と但馬地方

第一節 律令社会の成立

大化の改新 律令の規定と但馬

85

第二節 律令社会の制度

班田収授法 税の制度 戸籍と計帳 条理の制度

91

第二章 古代の民衆と但馬地方

第一節 但馬国正税帳

正税帳 但馬国正税帳

103

第二節 木簡と但馬地方

木簡 但馬に関する木簡

107

第三節 但馬の奴婢

奴婢の売買 奴婢の逃走

112

第三章 律令社会の変動と但馬地方

第一節 大土地所有の展開

浮浪と逃亡 三世一身の法 墾田永年私財法

117

第二節	奈良時代史と但馬	123
	政情の変遷と災害・疫病	
	政治の刷新	
	大嘗祭と但馬国	
第三節	平安時代史と但馬	127
	但馬の受領	
	宋船の来航	
	荘園の成立と発展	
	武士勢力の向上	
第四章	古代の宗教と文化	
第一節	古代仏教と民衆	137
	民間仏教	
	知識経	
第二節	竹野町の古代開創寺院	140
	行基と古代寺院	
	行基の活動	
第三節	但馬の国分寺	145
	国分寺の創建	
	但馬の国分寺	
第四節	但馬と竹野町の式内社	149
	但馬国の式内社	
	竹野町の式内社	

中世編

総論

第一章 中世の竹野

第一節 『但馬国太田文』と竹野

「太田文」にみえる竹野 鎌倉時代の竹野郷

157

第二節 山名氏の登場と竹野

山名時氏の帰順 山名氏の登場と竹野

162

第三節 山名氏治政下の竹野

南北朝～室町時代の竹野郷 郷内諸寺領の内訳 興長寺領の構造
郷内諸寺・諸寺領と山名氏との関係 山名氏の当郷支配の実態

168

第二章 中世の宗教

第一節 但馬守護職山名家と轟・垣屋家の外護

全体の流れ 各寺に対する山名家の外護 円通寺に対する外護
轟・垣屋家の外護

178

第二節 円通寺を中心とする臨済宗南禅寺派の発展と変遷

186

円通寺の発展 円通寺の再興と変遷 その他の寺院の変遷

第三節 熊野信仰の伝播

196

(1) 但馬への熊野信仰の伝播

覚増上人の活躍 鉢山寺 新宮山満福寺 正覚山楽音寺

熊野山新宮寺

(2) 竹野町の熊野信仰

熊野信仰の種類 大岡寺・熊野権現社 竹野浜・興長寺熊野権現

須野谷・若一王子 鬼神谷・若一王子社 小城・拾式所権現社

浜須井・十二社 羽入・新宮権現 阿金谷・熊野滝権現社

林・熊野三社大権現社

(3) まとめ

近世編

総論 近世の竹野谷と村民生活

第一章 戦乱の終結

第一節 近世のあけぼの

青葉城落城と秀吉の支配

226

第二節 近世開村の家々

細田家(轟) 安谷家(苜谷) 富森家(須野谷)

227

富森家(中村) 開村の家々と村

第二章 幕藩体制の成立と展開

第一節 国分けと変転する支配者

豊臣から徳川支配へ 出石藩 豊岡藩 小出家陶器藩

233

生野代官所 久美浜代官所 その他の支配者

第二節 藩の民政

検地と彦左衛門の義拳 年貢収納 地方知行制

240

第三節	藩の財政	250
	藩財政	
	藩	
	札	
	御用銀	
	産物会所	
第四節	村を治める役人	254
	郡奉行・地方役・代官	
	藩役人の出郷	
第五節	村のしくみ	255
	大庄屋組	
	村方三役	
	庄屋／組頭／百姓代	
	五人組	
	百姓	
第六節	巡見使・藩主の来往	264
	巡見使の来往	
	藩主の来往	
第三章	産業の発達	
第一節	農業	269
	稲作	
	畑作	
	肥料	
	刈畑	
	養蚕	
第二節	漁業	274
	漁法	
	漁場争い	
	鯨と海藻	
	製塩	
	川漁	
第三節	その他の産業	278

鉱業

段鉦山／金原鉦山／銅山銅山／三原鉄山

但馬牛 山林 紙漉 酒造 名産

第四節 さまざまな職業

竹野谷の大工と木挽の活躍 木地屋 獵師 その他の職業

第四章 竹野浜と北前船

第一節 北前船の定義と特徴

北前船の定義 北前船の特徴

第二節 竹野浜の北前船所有

宝暦年間 文化・文政年間 弘化年間 幕末・明治初期

第三節 北前船に関する諸法度

廻船式目 高札之写 船道定法

第四節 北前船の活動

出航までの手続き 竹野廻船の活動状況

浜田市外ノ浦港 『諸国御客船帳』 からみた竹野廻船の商いと航路

竹野廻船の規模

第五節 北前船と文化

333

317

311

306

303

291

第五章 庶民の生活

第一節 苦しい生活

厳しい身分制度と制限 宗門改と種々の証明書 物価の移り変わり

田畑永代売買と寄制地主制 副業 山論 愁訴 長寿者

第二節 災害と救助

飢饉と義民伊垣信高 火災 水害 雪害 地震・その他

第三節 民間医療

流行病 藩の医療対策

竹野谷の医師

鳥羽家の医師／甚澄／細田敬豊／富森家の医師／玄令と栄碩／藤原信房

第四節 年中行事

(1) 精神生活としての年中行事

精神生活とは 年中行事の特徴

(2) 年中行事の諸相 その(一)

年中行事の分類

(3) 年中行事の諸相 その(二)

春の行事

村オコナイ 船頭日待と村祈禱

五社山の大殿若経転読

月待行事とケド

彼岸会と涅槃会

正御影供

夏の行事

浜の祇園と祭礼

秋の行事

盆行事

伊勢参宮と国観音巡礼

荆木山鎮守八幡宮の祭礼

冬の行事

惣ケド

第五節 孝人・奇特人の賞賜

竹野谷の賞賜者

第六節 娯楽

娯楽のいろいろ

歌舞伎・人形浄瑠璃と制限

相撲

第七節 庶民の旅

庶民の旅

豪農の旅

細田敬豊／安谷要七／細田豊昌

398

393

389

第六章 教育・文化

第一節 私塾・寺子屋

池田草庵と竹野谷の門人 竹野谷の寺子屋・郷校

409

第二節 村を訪れた文人・その他

沢庵宗彭 崑山和尚 趙陶齋 頼春水 柴野栗山

413

蜂須賀斉昌 土岐雄之丞 池田草庵 村瀬藤城

多田弥太郎 仁科白谷 その他

第三節 竹野谷の文化人と豪農の学問

竹野谷の文化人

423

細田敬豊／細田豊昌／細田 圭

細田家の蔵書と文化的伝統 竹野谷の俳句会

第七章 寺院と庶民信仰

第一節 寺院

428

(1) 本末・檀家両制度の成立―とくに高野山真言宗の場合―

本末制度の成立 本末御改め 灌頂の授職（授かること） 継目の式

上人号を賜わる 結衆の結成 荆木結衆寺院の変遷 檀家制度

慶長十八年家康の条目 延宝二年家綱の条目 延享二年家重の条目

(2) 真宗と道場

道場から寺院へ 福成寺と中村道場 福成寺と但馬の道場

有力農民と教線拡大 中村の真宗門徒

(3) 陰陽道の流れ

陰陽道の存在 土御門家と近世陰陽道 但馬国陰陽道触頭・安谷掃部

陰陽師の職分 安谷清家の系譜 土御門家配下官金収納と京都上納

幕府触れ流し以後の陰陽道組織の拡大 幕府動向と陰陽道支配拡大との関係

土御門陰陽道の終焉

第二節 庶民信仰

(1) 村を訪ねた勧進者・宗教者

遊行勧進者・宗教者 竹野谷訪村勧進者の種別 勧進者への対応

勧進者の統制 勧進者と竹野谷

(2) 遊行上人の来訪

一 遍上人と興長寺 江戸時代の遊行形態

竹野を訪れた遊行上人

第四十九代一法上人／第五十代快存上人／第五十一代賦存上人

第五十二代一海上人／第五十五代一空上人／第五十六代傾心上人

第八章 海岸防衛と維新への胎動

第一節 異国船来航と海岸警備

藩と地元の対応 藩主・代官の巡視 上納金 寺院梵鐘調べ
村に入る情報 西洋の情報 国内の情報

514

第二節 維新への胎動

恵宏法印の入水

522

近・現代編

総論

第一章 竹野の明治前期

第一節 王政復古

(1) 明治の夜明け

山陰鎮撫使

廃藩置県

地租改正

528

第二節 医療と災害

(1) 医療と衛生

- (2) 地方制度
治安警察 戸籍 戸長役場 行政制度の変遷 大区小区 三新法
区町村会法
- (3) 神仏分離
(ア) 賀嶋宮と荆木山観音寺
中世の様子
江戸時代の様子
荆木山観音寺の其の後の流れ 祀りの内容 社家大浜家の台頭
神仏分離の進行
(イ) 竹野町の神仏分離に関する史料 竹野町の神仏分離の具体的な姿
別当寺について
旧神主家について
竹野浜の神主大浜家／須野谷の神司富森五良左衛門家／林の別当五良大夫家
森本の社人苗原次良太夫／御又の神子山森家／下塚の神主物太夫
切浜の神主宮崎家／浜須井の社人福井家
別当・旧神社から新神主へ

種痘 清潔法実施

(2) 水害と火災

明治の風水害 続発する火災

(3) 生活と規則

郡中儉約書 惣代取扱法

第三節 学制発布

(1) 学校教育への胎動

(2) 学制発布と小学校創設

(3) 初期の小学校制度と就学

各校区の状況 不就学 醸出金 授業料 初期試験制度

高等小学校の設立 岡崎尋常小学校卒業生の談話

第四節 飛脚から郵便へ

(1) 北前廻船

廻船の発展とその背景 竹野浜村廻船の活躍 大福帳にみる天社丸

客船帳にみる竹野の廻船 竹野廻船の衰退

(2) 交通と通信

飛脚制度の成立と発展 郵便制度への胎動 郵便制度の創業

経済の発展と郵便 事業経過の概観 特定局制度の制定

(3) 電信と電話

電信の開設 電話の開通と発達

第二章 竹野の明治後期

第一節 地方自治の確立

(1) 明治憲法下の新村

竹野村・中竹野村・奥竹野村・三椒村の誕生 村長が議長となる

第一回議会の様子 町村制 各村初代村長 役場の組織

(2) 新村の財政

財政状況

第二節 殖産興業の波

(1) 農業

米作り

種籾の浸漬／苗代／水田の耕起／田植え／中耕除草／稲刈り／脱穀調整

苗代の改良

(2) 農談会から農会へ

農談会

勸業会

新村誕生後の勸業会

村農会の設置

(3) 養蚕と畜産

養蚕業

養蚕技術の改良

夏蚕の飼育

牛の飼育 牛の飼育数 博 労 畜牛の改良

(4) 林業

林業

人工造林／植林の方法／木材の川出し

(5) 漁業

竹野地域の漁村

漁業／漁獲物の販売／あと網／地曳網／漁船／漁場

漁業組合の設立 魚の販売と魚問屋 漁船と漁業技術の改良 入会権の貸付

(6) 工鉱業

青井の石切り 紙すき 美含鉱山 鶴峯鉱山

第三節 日清・日露戦争

(1) 日清戦争

第四節 教育のたかまり

- (2) 日清戦争おこる 日清戦争従軍記 戦争犠牲者がでる 台湾の武力接收
日露戦争 日露戦争 兵事の状態 前線の激烈 日露戦没者
- (3) 富国強兵下の様相
従軍者遺族救護方法 城崎郡役所の戦時事務 援護活動
尚武会と在郷軍人会 明治期の救助態勢
- (4) 伝染病とのたたかい
伝染病相次ぐ コレラ患者発生する 伝染病予防法公布される
地区毎の衛生組合 隔離病舎の設置 医師・村医・学校医・助産婦
- (5) 農山漁村の暮らし
いなか芝居の届け出 県税からみる暮らし 村びとの生活状態
- (1) 国家主義教育と儀式
教育勅語 御真影 奉安殿
- (2) 日清・日露戦争と小学校
日清戦争 軍事思想の普及 日露戦争 戦後の教育
- (3) 明治時代の学校主要行事
運動会 修学旅行

第五節 廻船から鉄道へ

- (4) 青年夜学会の発足
青年会の前身
青年会
- (1) 鉄道
山陰線の開通
竹野駅の開設

719

第三章 竹野の大正期

第一節 大正デモクラシー

- (1) デモクラシーの浸透
大正デモクラシー
衆議院議員
県会議員
村会議員
- (2) 村政振興
町村長の権限拡大
川替え
消防組
中竹野消防組
- (3) 農会
村農会に技術員設置
部落農会の設立

723

第二節 産業の近代化

- (1) 農業
米麦作
米穀検査
柳の栽培
農閑期の出稼ぎ
- (2) 組合の設立

737

産業組合の設立

耕地整理

耕地整理組合／工法／工事の進捗

(3)

養蚕・畜産業

養蚕業

養蚕技術普及と収繭量

収繭量

畜産

牛の種付／牛の飼育数

(4)

林業

近代化する林業

炭焼 製炭改良と木炭組合

俵装の統一と木炭検査

(5)

大正年代の漁業

漁業

機船底引網漁業

鯛大敷漁業／大正七年の災害

(6)

商工業

賀嶋公園と竹野浜海水浴場

竹野浜海水浴場

竹野鉦山

竹野鉦山鬼神谷坑／竹野鉦山奥虫谷坑／長滝坑／竹野鉦山製錬所

第三節 災害と衛生

(1) 相次ぐ火災・水害

三椒村の二重火災 引き続き水の被害

(2) 大正七年大水災

未曾有の大水害 大水害の状況 数字でみる水災害

大水災の後遺症 被災者の救援

(3) 北但震災

地震発生とその概要 竹野村の被害状況 復旧への対応措置 援助と復興

(4) いろいろな病気

はびこる伝染病 流行性感冒の猛威 肺結核とトラホーム

医師の処遇と病舎の確保

(5) 第一次世界大戦と村民生活

第一次世界大戦おこる 村民生活の苦難

第四節 学校教育と社会教育

(1) 学校教育

実習の状態

(2) 社会教育

青年団の設立

処女会の設立

青年訓練所の設立

第五節 電気がつく

電 気

第四章 竹野の昭和前期

第一節 軍国主義体制の進展

(1) 選挙権の拡大

普通選挙の実施

(2) 軍事体制の強化

国家総動員法成立

満蒙移民

アメリカ・ブラジル・フィリピンなどの移住

戦後の海外移住

消防組から警防団へ

第二節 食糧増産と供出

(1) 農村経済の窮迫

農産物価格の下落と農村不況

経済更生運動

室戸台風による水稲の被害

米穀借受と貯蔵倉庫の建設

米麦作と供出制度

(2) 産業組合と農業会

796

783

781

産業組合の発展 農業会の設立

(3) 養蚕

繭価の下落

(4) 林業

森林組合の創設と木材の供出 木炭の生産

(5) 漁業の近代化

竹野港の改良 漁船の動力化と漁獲高 漁業協同組合から漁業会へ

魚の行商組合

(6) 商工業

海水浴協会の設立

第三節 前線と銃後

(1) 中国進出と第二次世界大戦

満州事変おこる 日中戦争と総力戦体制 竹野村稿軍会

第二次世界大戦に突入 相次ぐ村葬

(2) 戦時下の耐乏

一億総動員銃後の守り 総力の供出物資の応召 すべてが戦時色に

統制と配給の日々 終戦をむかえる

(3) 室戸台風

災害は絶えない 室戸台風の襲来

第四節 国民学校

(1) 昭和不況期下の学校

教員給与強制寄付 台風の被害

(2) 青年学校

発足 目的 教授陣と教育内容 活動内容

(3) 竹野谷青年学校

青年学校の統合 活動内容 敗戦と青年学校

(4) 国民学校の教育

国民学校への道 皇国民の教育

勤労働員・学校農場・薪炭増産・製塩・金属回収運動 学童疎開

(5) 婦人会の設立と活動

婦人会の成立 小城地区婦人会の活動

第五章 竹野の昭和後期

第一節 竹野町の誕生

(1) 戦後処理

農地改革

第二節 観光と産業の発展

(2) 新しい動き

町村合併

合併の目的／合併の必要性／町村合併促進協議会／合併促進協議会の活動

新村建設の基本方針／合併条件／各村の動き／新村誕生／新村の組織

竹野町の誕生 国民休暇村 消防団改組 城崎消防署竹野出張所の設置

竹野新港 竹野町の医療

(1) 農業

農業の機械化と経営の兼業化 米の供出制度から米作減反へ

農業改良普及員の駐在 圃場整備事業の推進

(2) 農業会から農協へ

農業協同組合の設立 農業協同組合の合併 合併後の竹野町農協

(3) 畜産業

昭和年代の和牛飼育 蔓牛 養鶏事業

(4) 林業

植林 木炭の生産減退 森林組合の合併

(5) 漁業

戦後の漁業 竹野港の整備 竹野浜漁業協同組合の創立

(6) 商工業

観光産業と国立公園 商工会

(7) 金融機関

竹野町における金融機関

但馬銀行竹野支店／但馬信用金庫竹野支店

第三節 窮乏から繁栄へ

(1) 欠乏を乗り越え復興へ

食糧難を乗り越える

インフレと新円生活

生活改善申合規約

(2) 災害とその対策

繰返す大型台風の襲来

豪雪とのたたかい

椒小学校の焼失

災害対策の推進

(3) 社会福祉の向上

竹野町国民健康保険

国民年金の支給

社会福祉協議会

伸びゆく福祉行政

(4) 保健衛生の進展

簡易水道の整備

環境衛生の向上

第四節 六三三制教育

(1) 戦時教育体制の払拭

墨ぬり教科書

占領軍の巡視

御真影返還

奉安庫(殿)の撤去

教育勅語返還

ローマ字の小学校門標

- (2) 新しい教育目標と学制改革
 - 教育基本法
 - 社会科の誕生
- (3) 新制中学校の発足
 - 発足当時の中学校
 - 校舎の建築
- (4) 定時制高校
 - 定時制高校の設立
 - 一卒業生の思い出
- (5) 教育委員会の発足
 - 教育委員会法の成立
 - 公選制の廃止
- (6) 町村合併と学校整備
 - 合併と学校の状況
 - 各校の新・改築陳情
 - 教育設備の充実
- (7) 小学校の統合と「竹野南小学校」の発足
 - 過疎と学校
- (8) 幼稚園教育の推移
 - 戦前の幼稚会
 - 戦後の幼稚園教育
- (9) 婦人会の歩み
 - 町村合併前の婦人会
 - 合併後の歩み
 - 農業協同組合婦人部
 - 消費者の会
 - いずみ会
 - 愛育班

第五節 道路整備進む

- (1) 竹野町の主な道路
- (2) 江野トンネル
- (3) 但馬海岸有料道路

論文

細田邸庭園

飛蛟泉庭園

北前船海難の一研究

あとがき

竹野町史編纂委員会（専門委員・執筆者）名簿及び執筆分担一覧

竹野町史編纂担当事務局名簿

付録

竹野町歴代町長・三椒村長・奥竹野村長・中竹野村長・竹野村長名簿

竹野町議会議長名簿（昭和三十年より）

写真・図・表一覧

934

992

1

6

7

